

ものがたり

# 慈濟

台風18号(クラトーン) 災害への支援



二〇二四年歳末祝福会のテーマ

正念を以て学びと悟りを勤修し、  
精進して菩薩道を歩みましよう



(撮影・陳宜青 モザンビーク・メクジ大愛農場にて)



慈濟日本サイト

# 目次

【編集者の言葉】

平穏で健康なことが即ち福祉である

善耕／訳

4

【今月の特集】

台風18号被害 慈濟支援の記録

御山凜  
何慧純／訳

8

【新書のすすめ・心した翻訳】

日本語版月刊誌『慈濟ものがたり』の翻訳ボランティア群像

二十七年間ひたすら心を込めて

葉美娥／訳

30

【親と子と教師、三者の本音】

小学一年の新入生 学校は面白い所

江愛實／訳

40

【国境なき愛】視力を救う

白内障手術の後 最も美しい作品を描いた

何慧純／訳

45

【聞・思・修】

街で歩む真実の道

荳荳／訳

50

【證嚴法師のお諭し】

代々受け継いでいく福と慧

心夔／訳

56

【農禪・生活】『朝食にマントウ』

簡単に食事を済ませ、

仏法の香に浸ることに時間を費やす

荳荳／訳

62

【慈濟のSDGs】

医療の普遍化

誰もが医療にアクセスできる世界へ

高雄外国語チーム  
日本語組／訳

74

【行脚の足跡】

福を知って、惜しんで、更に福を作る

濟運／訳

99

慈濟の出来事

11/15 | 12/21

濟運／訳

106

## 表紙



強い台風18号の影響により、新北市三芝区では多くの所で土石流が発生し、泥水が民家に流れ込んだので、直ちに180人余りのボランティアが清掃支援に駆けつけた。或る被災した60代の独居高齢者の家で、ボランティアが泥をかき出していた。

(撮影・陳忠華)

## 平穏で健康なことが即ち福祉である

今年、最初に台湾へ上陸した台風三号（ケミー）は、七月下旬、上陸して四時間で直ぐ海に出たが、台湾全土の一万五千方所で被害が発生した。この数字は、十年間で最も多い。そのうちの半数は、街路樹の倒壊や違法建築のトタンの落下などだった。また、その二日間に二十回もの「災害発生警告」のセルブロードキャストが配信されたが、その回数は気象署が一つの台風に対して発した頻度としても最も多い。

九月末の秋分の頃、慈濟の緊急支援は終了していたが、高雄と屏東のボランティアは依然として被災世帯の復旧に気を配っていた。台風十八号（クラトーン）は十月三日、台湾南部に甚大な被害をもたらし、再び多くの記録的な数字を

残した。月刊誌『慈濟』の執筆者とカメラマンは、高雄と屏東を訪れ、それぞれの様子を取材した。災害から六日目、彼らは二百人余りのボランティアと共に海の向こうの琉球郷（小琉球）へ渡り、バイクで八つの村の合計千六百世帯余りを訪問した。彼らは、住民たちに「心を落ち着かせる」祝福パックを届け、そのうちの二十四世帯が持続したケアを必要としていることにも気づいた。

高雄に上陸した台風十八号は、一九七七年の台風四号（テルマ）と似た経路を辿った。四十七年前の七月二十五日、台風四号が高雄南部に上陸した時は、高雄や屏東地域で四千棟以上の家屋が全壊し、二万七千戸が被害を受けた。證嚴法師は弟子たちを率いて視察すると共に支援活動を行い、それが縁となって、後に慈濟屏東支部が設立された。

災害をもたらしたどの台風も、台湾の気象史に刻まれているが、動員されたボランティアの支援や慈悲の足跡は、各地域における慈濟慈善史の一部で

もある。十月中旬、台湾では台風十八号被害の支援活動は一段落していたが、ミャンマーとベトナム、タイなどでは、慈済ボランティアたちが、九月の台風十一号（ヤギ）による被災の視察と支援物資配付活動の準備に追われていた。中でもミャンマーの東部と中部における被害が最も深刻で、被災者の家屋はもはや修復や補強ができる可能性を残していなかった。住民たちが水の中に佇んでいること、それが即ちかつて温かい家があったことを物語っているだけだった。

世間には苦しんでいる人が数多くいる。今月号の「慈済のSDGsシリーズ」では、SDGsの目標3「健康と福祉」との繋がりについて述べている。慈済医療について振り返り、どのようにして地域社会に行き渡り、慈済人医会が台湾から世界へ歩みを進めたのかを紹介している。彼らは、出来得る限り力を尽くしてへき地の無医村に向き、人工透析が必要な貧しい患者や世界中の難民、植物状態にある人、外国人労働者、脊髄損傷患者、聴覚障害者などに手を差し

伸べている。

いわゆる「福祉」とは、病に対する医療を指すだけではなく、心身共に健康で幸福な状態も含まれている。記者は台湾の衛生福利部国民健康署の前署長である王英偉（ワン・インウェイ）医師に単独インタビューをした。「社会的処方」と「慈悲と思いやりのあるコミュニティ」という概念に話が及ぶと、それらは長年にわたって慈済が行っている「医療と地域の慈善活動を合わせた奉仕モデル」によく似ており、全人的な心身の健康に効果をもたらしている、と語った。

台風災害への支援と健康福祉の平等に関する報道を編集していた時、私は法師が言ったことを思い出した。「慈済人がその目で見て、足を運び、支援の手を差し伸べることができる限り、苦しんでいる人々は祝福されるでしょう」。確かに、どこへ行っても人々の困難を解決し、幸せをもたらしているのだから、その足跡は「幸福の軌跡」なのである。（慈済月刊六九六期より）

「今月の特集」

# 台風18号被害 慈済支援の記録

中型の台風18号(クラトーン)は、高雄市小港区に上陸し、十四級(秒速約42M)の暴風が高雄と屏東地域を襲った。台風の勢力が弱まった後、逆に豪雨が北部に災害をもたらした。

延べ一万八千人のボランティアが災害支援に駆けつけ、浸水した被災世帯の住宅後片付けや清掃、そして、六十の学校と公園の復旧や清掃を手伝った。改めて天災の威力を目の当たりにし、敬虔に戒め慎まなければならないことが明らかになった。

# 倒木や折れた枝を見て

高雄港の外で荒れ狂う波、損壊した市街地の建物、なぎ倒された巨木……。台風が北上して通り過ぎた後、

DNAにマニュアルが刻まれたかのように、災害支援を始動した。

慈済人は支援の求めを待つことなく、各自率先して慰問し、

「何かお手伝いしましょうか？」と声をかけた。

## 台

風十八号が去った後の最初の土曜

日の午前、高雄市左營小学校から

高いデシベルの機械的な音が響き渡った。教師や生徒のために、できるだけ早

く安全な教育環境を整えようと、慈済ボランティアがチェーンソーを使って強風によって倒れた学校内の木を切断していたのだ。木の幹や枝の切り口の色から分

かるように、左營小学校の樹木は、殆どが丈夫でしつかりしたもので、腐食して空洞になっていたのは一部だけだったが、この台風がもたらした瞬間的な強風には敵わず、多くの木が倒れてしまった。

「ボランティアが快く手伝いに来てくれたことに、とても感謝しています。さもなければ、後片付けに一週間かかったかもしれません。昨日既に丸一日やりましたが、今日はもう力が出ません」。左營小学校の教頭、張玉芬（ジャン・ユーフエン）先生が、胸を撫で下ろしながら言った。

十月三日木曜日の正午、台風は高雄市に上陸し、秒速約四十二メートルを超える強風で樹木、看板、街路灯などをなぎ倒した。翌日金曜日には、校長も含めて二十人余りの教職員が、台風の後片付けを行った。力を合わせて、風で倒れた校門の引き戸型門扉を立て直し、傾いた木や枝、葉を撤去した。午前八時から午後四時まで、先生たちは力の限り、引きずったり、運んだり、清掃したりしたが、学校の出入りに関する場所及び扉の外の通学用歩道を元通りにするのがやっとならぬ。校内の被災状況に対応する力はす



台風18号は高雄で大量の樹木をなぎ倒した。慈済ボランティアはキャンパスを清掃し、授業の再開をサポートした。(撮影・池爾杰)

でに残っていなかった。校長先生の陳鼎華（チェン・デインフワ）さんは、軍にも支援を要請したが、高雄市の道路は雑多な物で溢れかえっていて、軍の災害支援部隊は、道路の通行確保及び市の復旧

を優先していた。

金曜日の夕方、左営区のボランティアは、自主的に電話で支援が必要かどうかを学校側に問い合わせた。陳校長はその時、一筋の光が差したように感じた。「月

曜日には平常通り授業ができるかもしれない！」。

左營小学校を含め、慈済は高雄で延べ五十校余りの学校を支援し、公園の復旧作業も手伝った。地元ボランティアの尽力のみならず、北部の慈済ボランティアも高鉄（台湾新幹線）の早朝の便に乗って支援に駆けつけ、彰化、嘉義等からも若者たちが自発的に赴いて尽力した。人々が整然と鋸で木を切ったり、散らかった枝を運んだり、落ち葉を掃いたりしていたのを見て、高雄のベテランボランティア鄭武南（ツン・ウーナン）さん

は、「校長をはじめ先生たちは慈済に後片付けの手伝いを要請してはいましたが、ボランティアたちは土曜と日曜の両日もやって来て、皆で善いことをしてくれました」と称賛した。

一戸ずつ訪ね歩いて、  
支援の必要な人を見つける

十月上旬の「奇妙な」台風十八号は、海上で四日半もうろろした後でやっと高雄市小港区に上陸し、北上した。高雄のベテラン訪問ケアボランティアの李

琇釧（リー・シウツワン）さんは、「台風十八号の強い風は直接小港から吹いて来ました。高雄の地形にはバリアとなる場所が全くないため、これだけ多くの木が倒れ、建築物の窓、フランス窓、天窓などが破損しました。比較的甚大な被害を被ったのはソーラーパネルですが、給水塔が消えてしまった家もありました」。

高雄市管轄区内で二千五百本余りの樹木が倒れ、十八万世帯が停電し、多数の住宅が損壊するほど、被害は広がっていた。そのため慈済人はキャンパスの復旧

に協力すると同時に、大規模な「安心家庭訪問活動」も展開した。慰問を行って大衆の心を落ち着かせると同時に、支援が必要な案件を見つけ出して、当面の手当の提供や住宅の修繕などを支援した。

では、訪問ケアで見た被災状況はどうだったのだろう。親子が同居しているのか、老夫婦の二人暮らしなのか、又は一人暮らしなのか、低所得又は中低所得世帯の補助は受けているのか、もし家屋が損壊していたら、それは持ち家なのか賃貸なのかなどを聞き出す必要がある、できる限り情報を収集して、本当に助けを

47年ぶりに再び台風が高雄から上陸し、その強風で都市の  
景観は多大な被害を受けた。(撮影・頼廷翰)





必要としている人を見落とさないようにしなければならなかった。仮に社会福祉資源の支援を必要としない人でも、安心祝福ギフトセットを届けて良縁を結んだ。

ボランティアは、依然として停電状態にあった大寮静思堂から外に出て、袋分けした祝福ギフトセットを携え、多ルートに分かれて家庭訪問を展開した。十月三日、台風十八号が送電網に損傷を与えたことで、高雄と屏東地域で大規模な停電が発生した時、大寮区では二万世帯余りが電気を使えなかったこともあり、十

新民小学校の校庭脇で、人々は力を合わせて倒れた木や枝葉を片付け、教師や生徒たちが、台風の翌週から安全な学習環境で学べるよう整えた。被災後、慈済は高雄の50余りの学校及び公園の清掃と復旧に協力した。  
(撮影・王忠義)

月五日の安心家庭訪問の当日になって、まだ数千世帯が電力の復旧を待っていた。

「冷蔵庫で物を冷やすことができなくなり、食べ物が腐ってしまいました」。静思堂近くに住む主婦の張簡（ジャン・ジェン）さんによれば、停電していた数日間は即席麺を食べて過ごしていたそう

金山三和測候所の観測によれば、台風周辺の大気の影響で、4日、北部の北海岸では600ミリを超える記録的大雨となった。

10月4日午前5時、勢力を弱めて熱帯低気圧になった。

10月3日午後12時40分、高雄市小港区に上陸。

三芝 金山 万里

高雄 小琉球 屏東

台飈18号の進路

## 台風18号の被害

訳・何慧純

- 台風警報が発令されてから、**4日と4時間**を経て上陸した。最も長く警報が続いた台風である。
- 1977年の台風4号以来、しかも10月に高雄から台風が上陸したのは今回が初めてだった。
- 気象庁は、高雄市と屏東県の一部の市町村に暴風警報を**3回**発令し、高雄市内の汕尾及び仁武では秒速**46.2m**という最大瞬間風速を観測した。
- 台風周辺の気流と地形の関係で、台湾北部には冠水や浸水の被害がもたらされた。10月3日は基隆で降水量が**408**ミリに達し、これまでで最高を記録した。

だ。自宅はモーターによる給水ポンプを使用しているため、一旦停電すると、蛇口から水が出なくなるので、外から水を運んでくるほかなかった。すでに七十歳で、足もあまり良くない彼女にとつて、停電と断水の日々は相当苦勞したことになる。

「この中にはまぜそばが入っています。とてもおいしいですよ」。彼女の状況を理解すると、李さんは丁寧に赤い手提げ袋を手渡した。中には、證嚴法師と世界の慈濟人からの祝福ギフトが入っていた。十月五日と六日の二日間、慈濟ボ

ランティアは高雄だけで、九百三十八世帯を訪問した。そして、住宅が破損しても自力で修繕することができない生活困窮者や一人暮らし或いは夫婦二人暮らしの高齢者に対しては、適切な修繕の支援を提供することにした。

## 旗津区での修繕 路地が大変なことに

住宅の損壊状況と言えば、慈濟高雄災害対応センターの総指揮である潘機利（パン・ジーリー）さんによると、修繕

が必要な被災家屋は旗津区が最も多く、そのうちの一人は、一人暮らしで八十歳の楊おばあさんだった。旗津の北端の海軍第四造船所付近に住んでおり、元来の住居は三面だけがレンガ貼りの小さな一部屋しかない平屋で、道路側の戸口は薄い木の板で室内と室外を仕切っているだけだった。

台風十八号が甚大な被害をもたらした後、楊おばあさんの家の戸口の枠はまだ残っていたが、道路に面した木の板は壊れてしまった。親切な近隣住民が、急いで回収資源の中にあつた広告用のキャン

繕したのみならず、お年寄りがより快適で安心して生活できるよう、室内のスペースを測定して浴室スペースの改善も査定した。

地元の全てのボランティアと他の県や市の慈済ボランティアも駆けつけて尽力したおかげで、高雄の「安心家庭訪問」は大方、双十節前に一段落した。そして、家庭訪問後に新たに発見した長期ケアケースへの寄り添いと支援が、既に始まっている。

「台風三号（ケミー）の後、上人は特に、私たち慈済人が鄰長や里長、公的

バス布で仕切りを作り、高齢のおばあちゃんの基本的なプライバシーを守った。潘さんと李さんたちボランティアチームが訪問し、祝福ギフトセットを届けて楊おばあさんを慰めるだけでなく、直ちに専門の修繕ボランティアにも連絡を取り、塗料を焼き付けた鋼板やC形鋼などを用意し、現場で切断や溶接、ネジ締めなどを行って、住宅正面の壁と窓を急ピッチで仕上げた。

潘さんによれば、修繕工事は十月十日、慈済ボランティアが旗津区へ被災視察に向かつてから四日目に終わった。扉を修

部門と密接に協力していくようにと念を押しました」。李さんは、旗津区での訪問ケアを例にあげて説明した。高雄の慈済人は、初めて海に面した離島地域で災害復旧活動をしたが、現地をよく知らないこともあり、鄰長や里長、地元住民の案内で路地を歩き回って初めて、助けを必要としている人を見つけることができた。慈済人の実践による成果が目に見えた時、地元住民は熱烈に歓迎した。

「楊おばあさんの家の修繕が終わった時、里長と路地に住んでいる人たちが全員出てきて、私たちに拍手を送ってくれ

ました」と李さんは興奮気味に言った。  
被災世帯に寄り添い、  
対面でケアする

台風が来るたびに、災害対応センターの総指揮者である潘さんは、ほとんど毎日高雄の静思堂に駐在していた。彼は、既製のショッピングセンターを経営しているが、七月の台風三号がもたらした広範囲の洪水被害は、彼の店舗にも影響を及ぼした。しかし、彼は依然として災害支援に専念した。六亀区の住民が安全な



場所に避難した時、彼は地元住民が緊急に自宅を離れたことを考慮して、結縁（けちえん）しようと発心し、彼らをショッピングセンターに招いて、適切な衣服を緊急に購入できるように手配した。

彼は二〇〇九年の台風八号（モーラコット）を思い返した。旗山区にあった自分の既製のショッピングセンターは大き

安心祝福ギフトセットを手に、ボランティアたちは「安心家庭訪問」を行った。

（写真左上 撮影・王坤河）

大樹区の住民は、慈済人が慰問に来てくれたことに感謝し、お互いに祝福し合った。

（写真左下 撮影・郭秋佩）



な損失を被り、多くの新品の衣類が水に浸かって廃棄処分になってしまったのだ。「当時、旗山区はまだ高雄県に属していたので、私はずっと県政府の人が旗山まで補助の査定に来るのを待っていました。あの時は、浸水の高さを少し高めに報告すれば、より多くの補助金もらえると思っていました」。

しかし、その悪い考えは結局実現することはなかった。潘さんは丸一日待ったが、むしろ慈済ボランティアの方が先に来て、出来立ての即席飯を届けたくれただけでなく、證嚴法師のお見舞いの手紙

まで以上に、戒め慎み、敬虔にならないければならない、と法縁者に注意を促したいそうだ。

「高雄はあまりこのような強い台風に襲われることはなく、あの瞬間的に災害を引き起こす強い風は、多くの住民を怯えさせました。私たちは『安心祝福ギフトセット』を届けることで、被災者の方に落ち着きを取り戻してもらっています。慰めることは助力となりますから、『あなたは一人ではなく、證嚴上人と全世界の慈済人の愛が一緒にいます』と伝えました」。

まで持ってきて来てくれたのだ。慈済が着実に取り組んでいることを彼は確信した。

「ですから今、防災と災害支援に取り組んできたことで、自分はより人々に寄り添えるようになったと思っています。被災者が必要としている物や被災世帯の気持ち、または家族を失った時の心の痛みが分かるようになりました。対面でのケアは、本当に大事です」。彼は、慈済人がコミュニティに入ることのプラス効果を肯定している。そして、悪化する傾向にある極端な気候と向き合い、決して軽んじてはならず、これ

## 台風18号(クラトーン) 慈済の支援活動統計

- 台湾全土で **16** の災害対応センターが開設され、ボランティアは延べ **18,055** 人動員。
- 累計で **7,582** 世帯を支援、**15,006** 人に寄り添い。
- 熱い食事を **1,075** 食提供。
- 祝福の贈り物（支援物資）**4,776** 件。
- 学校や公園の清掃を **60** 箇所実施。

（2024年9月29日～10月22日までの統計）

新北市

## 泥まみれの住宅 タイムリーに支援

撮影・陳忠華 訳・何慧純

**台** 風18号（クラトーン）は熱帯性低気圧に変わって消滅したが、周辺の気流により豪雨が続き、台湾の北海岸は大きな被害を受けた。十月四日に多くの地区で深刻な浸水や土石流などが起き、台北市と新北市、基隆市の慈済ボランティアが直ちに動員された。そして、新北市の金山区、万里区、三芝区及び基隆市などの被災者三百世帯あまりを訪問し、住宅の後片付けをしていた住民に炊き出しを行うと共に、早急に泥の撤去や復旧を手伝った。

（慈済月刊六九六期より）



新書のすすめ・心した翻訳

——日本語版月刊誌『慈濟ものがたり』の  
翻訳ボランティア群像

# 二十七年間ひたすら 心を込めて



二十七年間、日本語版の月刊誌『慈濟ものがたり』は  
毎月欠かすことなく発行されてきた。

裏方の翻訳ボランティアたちが、一筋に行って来た奉仕によるものである。  
毎週集まって校正校閲し、互いに日本語力を磨き、  
慈濟の善い行いを日本の読者に紹介している。

文・呉惠晶 訳・葉美娥

ものがたりの始まりは「日本語版の  
月刊誌を作ってください」。證嚴  
法師が杜張瑤珍（ドウ・ツアンヤオツン）  
さんにこう指示した時、彼女はただ呆然  
とするだけだった。「私はただの主婦な  
のに、出版物の刊行という重責を引き受  
けられるだろうか」。

杜さんは、花蓮慈濟病院の初代院長、

杜詩綿（ドウ・スミエン）医師の夫人  
である。皆は敬意を込めて「杜ママ」と  
呼んでいる。日本と台湾の間を頻繁に行  
き来していた彼女は、時には日本に見学  
に行く慈濟志業体の人員に同行し、また、  
静思精舎を訪問する日本人に付き添うこ  
ともあった。

当時の慈濟日本支部は、東京に設立し

て間もなかったが、事故に遭ったり病気になったりした台湾人旅行者を支援するだけでなく、定期的に路上生活者のケアも行っていた。杜さんが、ボランティアの活動記録と慈済志業の紹介を日本語に翻訳したことを報告した時、證嚴法師は、日本語の刊行物があれば、日本の人々に慈済を紹介するのに便利ではないだろうかと提案した。「日本の人は文庫本に慣れており、ポケットに入れて、いつでもどこでも読んでいます」。すると證嚴法師は、「では、どうやって小さいサイズにすればいいかを考えてください」と指示した。杜さんは、その時初めて證嚴法

す」と彼女は首を傾げながら、微笑んで言った。

「どうやって始めたらいいかと悩んでいたところへ、彼女たちはまるで菩薩のように現れたのです。皆、日本語の基礎がしっかりしていました。特に三宅先生は日本人なので、私たちを指導するには最もふさわしい方でした」。彼女たちを主力として、一九九六年五月十五日、日本語版月刊誌『慈済ものがたり』の創刊号が発行された。

日本語版月刊誌『慈済ものがたり』は、32折り(B6)判、112ページでポケットサイズである。(撮影・陳忠華)



師の意図に気付いた。法師は、その役目を自分に引き受けてほしいと言っているのだった。

それは一九九六年のことだった。彼女は七十歳で、どこから始めたらいいのか、全く見当がつかなかった。ただ、おぼろげに覚えているのは、それから間もなくして羅美麗(ロー・メイリー)さんと陳靖蜜(チェン・ジンミー)さん、そして三宅教子さんも参加してくれるようになったということだ。「彼女たちがどのようにして現れたのかは覚えていないのですが、その時はとても嬉しかったです。必要な時に、必要な人が来てくれたので

## プロとアマチュアが協力し合う

最初の日本語ボランティアチーム（以下、日本語組）の勉強会は、台北市忠孝東路にある旧慈濟台北支部の応接間だった。皆、最新号の月刊誌『慈濟』と、隔週発行の新聞『慈濟道侶』から、最適な記事を選んで翻訳した。その内容は主に證嚴法師の開示、慈濟の活動内容、ボランティアの体験談などだった。

杜さんは、自分は日本で育ったので、中国語の基礎が弱く、最初の頃、分からない時は娘さんに聞くか、辞書でその意味を調べなければならなかったと語っ

た。幸いなことに、羅さんと陳さんの協力のもとに、三人で互いに原稿を校正し合い、最後に三宅先生に直してもらったそうだ。

羅さんと陳さんは、慈濟に出会ってから、自主的に日本語組に参加した。そして、創刊号の少し前から会社の経営者であった陳植英（チェン・ジン）氏が参加するようになり、第二号から正式なメンバーになった。一九九二年に日本語版『静思語』出版の際の協力者だった陳絢暉（チェン・シュエンフェイ）氏は、このプロジェクトに多くの提案をしてくれた。三宅先生が仕事の関係で『慈濟もの

がたり』の編集に専念できなくなったので、山田智美さんを推薦してくれたのも彼だった。日本大学中国語学科を卒業した山田先生は中国語が堪能で、他の人との交流も全く問題なかった。彼女は原稿の校正と編集職員になった。その後、子供の教育のために日本に帰国した後も、毎月 の原稿の校閲作業を続けてくれた。

日本語組に参加する人が増えるにつれ、プロ編集者の協力も得られるようになったことで、翻訳の質も量も段々と向上した。公務員を退職した高碧娥（ガオ・ピーオー）さんは、当時、日本語のタイピングができる数少ないボランティアの

一人で、全員の手書きの原稿を持ち帰ってタイプしていた。すでに七十歳になっていた杜さんも、娘さんに教えてもらいながら、ワープロの操作と入力を学び始めた。

原稿は山田さんがリモートで校閲をしてくれているとはいえ、毎週火曜日の勉強会での翻訳学習は、誰が主導したら良いのだろうか？日本語組では年長者が一時的にこの重責を引き受け、黒川章子先生が登場するまで交代で教壇に上がって指導した。

杜さんは、「黒川先生は台湾に嫁いだ日本人です。皆に翻訳の指導をしてくだ



さるだけでなく、月刊誌の校正もしてくださいます。彼女は本当に頑張ってくれていて、大変だと思います。感謝を申し上げたいです」と言った。

日本語組の先生役は、三宅さん、山田さん、黒川さん以外にもう一人、日本天理大学の金子昭教授も引き受けてくださったことがある。金子先生は台湾に滞在した三カ月の間、日本語組を指導しただけでなく、慈済の研究にも投入し、さ

日本語版月刊誌『慈済ものがたり』の勉強会は、毎週火曜日に行われ、先輩が後輩を導いて、一字一句吟味しながら校閲した。  
(撮影・林鳳琪)

らに『驚異の仏教ボランティア——台湾の社会参画仏教「慈済会」』を著し、彼が理解していた慈済を紹介した。

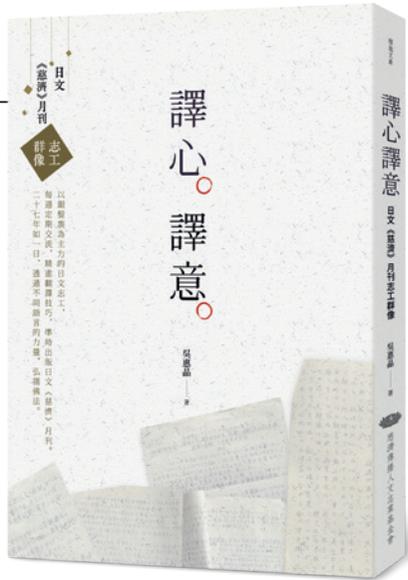
「金子先生の推薦で、多くの日本の学識者や団体が、慈済を理解しよう台湾に来るようになりました。先生の本は、慈済を理解しようとしていた日本の人にとっても大きな影響を与えたと思います」と黒川さんが言った。

## 翻訳を通して仏教の世界に触れる

創刊当時の頃を振り返り、杜ママは、證嚴法師と人文志業の王端正（ワン・

ダンゾン）執行長から「日本語月刊誌を引き受けて、ストレスになっていないですか」とよく尋ねられたことを思い出した。その実、ストレスに思ったのは最初だけで、新たなチャレンジに直面しながらも、ボランティアたちは皆、楽しく勉強し、毎月の出版の前は、逆に無私の喜びを感じるようになった。

二〇〇五年には、慈済人文志業センターが関渡に移転し、日本語組勉強会の場所も引越した。多くのメンバーにとっては前より少し遠くなったが、それでも互いに切磋琢磨する機会を大切にしている。二、三十年が経過するうちに、



## 心した翻訳

日本語版月刊誌『慈濟ものがたり』の  
翻訳ボランティア群像

作者：吳惠晶

出版：慈濟傳播人文志業基金會

「慈濟道侶檀施会」への入会を歓迎します。

毎年1200元（約6000円）の寄付で、  
二カ月ごとに良い本を贈呈。

コールセンター：+886-28989000 内線 2145

髪の色がグレーからシルバーになった人もいれば、若い世代が参入してくれる一方、もちろん、先にこの世を去る人もいた。変わらないのは、謙虚で礼儀正しい気質、翻訳文を議論する熱心さ、そして勤勉でエネルギーシユな活力である。

彼らが一緒に耕してきた成果は、『慈濟ものがたり』を定期的に発行してきたことだけでなく、日本からの訪問者の案内、解説などの任務にも現れていた。そして「杜ママ」は、六十八歳から始めて今、九十八歳になっても、常に頑張り続けているのだ。彼女こそが日本語組の

生きた歴史であり、精神的なガイドでもある。「この機会を与えてくださった證嚴法師にとっても感謝しています。そしてパートナーたちのサポートにも、感謝以外に適切な言葉が見つかりません」。

一人の主婦から翻訳者になった彼女はこう語った。

「以前の私は、仏門の外でぼんやり立っているだけでしたが、日本語版月刊誌がその扉を開いてくれました。おかげさまで、一歩一歩仏教の境地に入るに従って、やっと仏様にお会いできた喜びを感じました」。(慈濟月刊六九二期より)

## 小学一年の新入生 学校は面白い所

### 問

子供が幼稚園から小学校に上がり、  
始業からしばらく経ってもなお学校に行きたくないと言う場合、  
どう導いたらいいでしょうか。

### 答

・登校したくない子供は、それぞれ

の理由を持っていますから、保護者と先生の助けが必要です。

良き友人のHさんのお孫さんは、今年

小学校に上がりましたが、毎朝登校する時はいつも、泣きながら両親とお爺さん、お婆さんと「おおげさな別れ」をするそうです。その理由は登校したくないからです。

家族全員が心を砕いて「おおげさな別れ」を演じながら、むせび泣く子供にどうして学校に行きたくないのか尋ねました。子供も理由が答えられませんでした。そんな中、担任の先生からいくつか重要なキーワードを聞きました。

### 前もって準備する

先生はこう言いました。

「学校が始まる前に時間のある時や休みの日に、お子さんを連れて学校の滑り台で遊んだり、一年生の教室を見せたり

するのいいと思います。もし、教室の扉が開いていけば、中に入って座ってみましょう。そして、ここがこれから通う学校ですよ。新しい先生やクラスメートに会ったり、色んな授業や団体活動があったりするのよ、と子供に話してあげましょう」。

「毎日登校する時、お子さんと約束しましょう。お昼十二時の下校時間になったら、お爺さんかお母さんが迎えに行くこと、午後は宿題を書き終えたら、あなたを連れて公園へ遊びに行くこと、これでいいですね、と約束します」。

また、「初めは親と離れることで泣くお子さんが少なくありませんが、暫くすれば、環境にも先生やクラスメートにも馴染んで泣かなくなりますから」と先生は付け加えました。

## 仲間を捜す

我が家の向かいに双子が住んでいません。去年の九月、彼らも小学一年生になりました。毎朝七時半きっかりに、手を繋いで歌を歌いながら家を出て、午後四時半には、手を繋いで帰ってきます。彼らが泣きながら学校に行ったとは、聞いて

たことはありません。

路地の入り口にある退職した校長先生の家にも、小学一年生になる女の子のお孫さんがいます。毎日笑顔で登校し、おおげさな別れをする必要はありません。というのも、隣に四年生の女の子が住んでいて、毎朝彼女と手を繋いで登校してくれるからです。

別れる不安の気持ちを和らげるには、小学校に上がる前から、同じ幼稚園を卒業したクラスメートや近所に住む子供と一緒に登校してもらえば、泣いたり、登校拒否したりすることは減るでしょう。

## 先生というお母さん

先生は、子供にとって学校でのお母さんです。

小学一年生の子が登校したくない時、その過程においては家族の付き添いの外に、先生が重要な役割を果たします。家から学校まで、家族が送り

届ける間はおおげさな別れが続きますが、教室の前に来ると、突然終わるので。Hさんによると、「とても不思議です！孫の手を先生に



渡すと、先生は軽く孫の手を引いて席に座らせてくれます。孫は涙ぐんだままですが、直ちに号泣は止むのです」。

先生の経験と包容力はとても大事です。Hさんのお孫さんは、授業が始まるとよく、一人で教室の隅に立っていました。先生は無理矢理、団体のルールに従わせようとはしませんでした。子供の情緒が落ち着くのを待ってから席に連れ戻し、ゆっくり馴染みのない環境になれるようにしていきました。一カ月経った頃、子供は楽しく登校できるようになりました。小学一年生は、幼稚園に通い、団体生活を経験してはいるのですが、それでも

新しい環境、新しい先生、新しいクラスメートを怖がる子もいます。保護者は子供が成長して適応するまで辛抱強く待ち、先生も心を大きく持つて新入生を受け入れると良いでしょう。

基本的に、保護者は約束の時間通りに子供を迎えに行き、子供に安心感と信頼感を与えることが大切です。先生は、子供にとって学校でのお母さんだと言えます。小さい子供は、クラスで良い友達がいれば、親と離れる焦燥感はだんだん消えていきます。毎日朝日が上ると意気揚々と登校する子供の姿は、夢ではないのです。（慈濟月刊六八九期より）

## 国境なき愛

文、撮影・ジャマイカマエデイゴ（フィリピン慈濟眼科センタースタッフ） 訳・何慧純

### 【視力を救う】

## 白内障手術の後 最も美しい作品を描いた

□経過 慈濟フィリピン支部の施療活動は一九九五年に始まり、これまで延べ三十万人が恩恵を受けた。眼科センターの外来には、二〇二三年延べ二万人を超える人が訪れ、延べ一万四千人に医薬品が配付され、手術の件数は三千例近くに上った。延べ千二十三人の慈濟人医会の医師と、延べ千五百人余りのボランティアが無償で奉仕をした。

フ イリピン慈濟眼科センターは、一月二十三日に珍しいプレゼントを受け取った。それは、七十九歳のコンラド・ペニャモラさんからのもので、二カ月間掛

けて描いた二枚の油絵は、彼が視力を取り戻してから初めて創作した作品だった。「私を助けて下さった全ての皆様に感謝します。特に慈濟のお陰で、二〇二三



●白内障手術の後、コンラドさんは客から依頼された絵画の制作に追われていた。

年七月に白内障手術を受けることができました。手術後、多くの人から肖像画の作成を依頼されましたが、私は先ず證嚴法師と眼科医の李悦民（リー・ユエミン）先生の肖像画を描くことに決めました。これは、私が描いた中で、最も美しい絵です」。

この三年間、彼は白内障に苦しめられ

て来た。視力が回復してから自分が当時描いた家族の絵を見ると、極端に色が偏っていることが分かった。今彼はやっと仕事に戻り、以前にはなかった活力を感じている。

フィリピンでは貧富の差が大きく、貧しい人は病気になる医療費を負担するのも難しい。慈濟は、一九九四年にフィ

リピン支部を立ちあげ、翌年から施療活動を始めた。二〇〇七年には、マニラの志業パークに施療センターをオープンした。膨大な数の患者が訪れる眼科外来は、二〇一六年にソフトウェアとハードウェアを買い足し、正式に眼科センターをオープンした。慈濟人医会の医療スタッフがそこでボランティアとしてシフト制で診察にあたり、更に各地に赴いて眼科の施療を行っている。

眼科センターは、週に平均延べ七百人を診察している。患者が手遅れで失明することによって生計に深刻な影響が出ないよう、患者に無償の検査や手術を行っている。今年二月には、ラモン・マグサイ

サイ賞基金会（RMAF）の変革統率学院と協力して大規模な施療活動を行った。基金会のソーザン・アヴァン総裁は、「慈濟には優秀なボランティアがいて、手術や術後の経過観察のためのマニユアルまで作ってくれただけでなく、指導と経験の分かち合いもしてくれました」と言った。アジアのノーベル賞とも呼ばれるマグサイサイ賞を、證嚴法師は一九九一年に受賞した。今回の二日間の施療では、十二人のフィリピン慈濟人医会の医師が、二〇二二年マグサイサイ賞を受賞した服部匡志医師と共に白内障の手術を行い、二百人余りの貧しい患者の目に光明を取り戻した。

午前三時、まだ空が暗いうちの慈濟眼科センターには、すでに家族に付き添われた患者が待っていた。その日は彼らにとって大切な日であった。

五十六歳のエステラさんは、夫婦が前後して白内障に罹り、失業してしまった。彼女は既に全く見えなくなっていて、孫のマシユウさんの手にすがって、階段の上り下りをしていて。一家は既に生活が困難になっていたので、白内障の手術費を負担する余裕はなかった。

昨年、エステラさんが慈濟眼科センターへ検査に訪れた時、彼女の病氣は病院で検査する必要があったことが分かったが、彼女は再診に訪れなかった。今年

二月ボランティアは、眼科センターで検査した後、急いで手術する必要がある患者と一人ずつと連絡を取り、手術は無料であること、内科医による手術前の判断の説明もあることを伝えた。エステラさん親娘はそれを聞いて、嬉しさのあまり飛び上がった。

白内障の障害が取り除かれた後、エステラさんは、かなり歳をとってしまった夫の顔を、もう少しで見分けられないところだった。彼女は孫のマシユウさんに向かつて涙を流さずにはいられなかった。「お前の顔が見えるよ」。手術室の外で患者と家族が泣いたり笑ったりして、改めて家族が団欒の機会を得た。

（慈濟月刊六八九期より）

## 街で歩む真実の道



鉄板焼の店主は、  
竹筒募金箱に六十一元しか入っていないのを見て、  
五百元札を取り出して寄付した。

お粥の店の女将さんは、  
「どうぞ座ってお粥を食べて行って下さい。ご馳走しますから」と  
声をかけてくれた。

路地を歩いて募金に協力してくれている慈濟の「愛ある商店」を訪ねる、  
というこの修行をしていると、  
歩きながら社会の温かさも冷淡さも感じ取ることができ、  
感謝の気持ちで一杯になった。

## 月

末の数日間はいつも、「愛ある商店」に向いて寄付金を集金するのだが、あの日の夜は、立て続けに十軒回った。徒歩で二時間近く歩いて、汗だくになりながら、重い小銭をリュックに入れて背負っていると、見知らぬ人たちからの愛を感じることができ、私の心はとても感動していた。リュックはとても重たかったが、足取りは軽かった。

旧暦十五日の空に輝くお月様と星々が、車が行き交う街を歩く私に寄り添ってくれた。その柔らかな光は、穏

やかさと平和を感じさせ、美しさと哀愁に満ちたこの世を静かに見守ってくれていた。街の至る所を歩いていた私は、正に修行の道を歩んでいたのだ。證嚴法師の写真が埋め込まれた数珠を手にして出かける時は、心の中で話しかける。「上人様、散歩に行きますよ。私たち弟子が店主とどう交流しているのかもお見せします。どうか安心してください」。

お粥とおつまみを販売する店の女将さんが、「師姐（女性ボランティアの呼称）！お粥を食べてって……！」と私に



呼びかけた。私は「最近、あまり食欲がないのです。テレビのニュースで、戦争の避難民が一日にビスケット二枚しか食べられないのを見て、涙が溢れました。その時からあまり食欲がないのです。ご好意には感謝しています」と答えた。

「お宅で売っている碗粿（ワーグイ）<sup>①</sup>には、ベジタリアンの物がありますか」。私が台南碗粿（ワーグイ）を売っている店の人に尋ねると、「本店から出たものを届けて来るので難しいですね。私は一日も肉なしには過ごせません」という返事だった。私は「魚も肉も食べるなら、もっと野菜を食べた方が健康に

いいですよ」と言った。その店の人とは数カ月間にわたって交流していたため、既に気さくに話をする事ができた。続けて私はこう言った。「漢字は奥深いですよ。肉という字はどう書くのかご存知ですか？ 肉には人という字が二つ入っていて、肉を食べることは命を食べることなんですよ……」と言った。彼は笑い出した。帰り際に、もっと野菜や

<sup>①</sup> お米をすりつぶして蒸し上げた茶碗蒸しのような台湾のB級グルメ。

店の出入り口の横に愛の竹筒募金箱を置いて客に小銭を入れてもらう。愛が伴えば、小銭も愛になる。50銭でも人助けができる。

果物を食べるよう薦めた。

鉄板焼の店主は、私が寄付金を数えているのを見て、「今日はいくらですか?」と聞いた。六十一元だった。「少ないね」。店主はポケットから五百元札を取り出した。本当に感動した! 私が「菅光路にあるお店にも、愛の竹筒募金箱を置かせていただけませんか?」と聞くと、店主は快諾してくれた。ありがたい! 店主の真心と行動力に心から感動した。なんと善人の多いことか。

私がいつも店主にありがとうと言うので、今では、多くの店の人が私に会

うと、自然にありがとうと言うようになった。あちこちで「ありがとう」という声が聞こえるとは、何と和気藹々とした社会なのだろう。

「明日の次はまた明日、何と明日の多いことか。人生は明日ばかりを待っていれば、時を無駄に過ごすことになる」という詩がある。待っているよりも、直ちに行動に移せばよいのだ。だから、用事で出かける時、いつも竹筒募金箱を持ち歩き、沿道で縁を結ぶ店を探すようにしている。確かにそういう店を募るのは容易ではなく、話を切り出せ

ばそれで結ばれるというものでもないが、一歩踏み出せば、チャンスは訪れるのだ。

その過程で、失敗して挫折したこともあったが、気を静めて原因を考えてみると、私自身の初心が消えていたからだだった。一刻も早く竹筒募金箱を押しつけないという気持ちだけしかなく、店と人とが愛の竹筒募金箱を通して慈済と良縁を結べるようにしたい、という初心を忘れてしまっていた。「毎日が人としての始まりであり、一瞬一瞬が自分への戒めでもある」と「静思語・良い言

葉を話す」にあるように、敬虔な気持ちに戻って再出発するのはとても大事なことである。

慈済は「実践」を通して発展して来たのであり、実際に行動して初めて様々な状況を体得することができるのである。慈済の菩薩道は修行の道であり、經典の教えを実践する道であり、真理への道でもある。前世で自分が努力し、今世でも精進していることに感謝し、来世で仏教に学ぶ因縁に巡り会い、いつの人生でも悟りの道を歩むことを願っている。(慈済月刊六九〇期より)

## 代々受け継いでいく福と慧

慈済とは、善と愛が出会うところであり、

一代目の慈済人によって、それが形となって現れました。

人間（じんかん）菩薩を多く招き入れるだけでなく、

各自の家族でも善と愛と福で以て家伝とし、

代々受け継がれていかなければなりません。

### 毎

年二回にわたって行われる、認証授与式は、十一月二日、歳末祝福会と共に、新竹で今年第一回が行

われました。時間が経つのは早いもので、もう直ぐ新年を迎えようとしています。一分一秒は知らず知らず

のうちに過ぎて行き、もし、一日に八万六千四百秒もあるのだから、一秒なんて大したことではないと思うならば、滑り台のようにあつという間に時間は過ぎ去ってしまい、人生も過ぎて行き、その価値は失ってしまいます。一分一秒を大切にし、日々すべきことを心して行ってください。

台北から新竹、桃園、台中へと行きますが、到着すると、直ちに目出席者を確かめています。そして、創設当時のベテラン慈済人が黒髪から白髪になっても、その道心が退いていない姿を見ると、これこそが最も貴いものだ

と感じます。もちろんその場に来ていない人もあり、心残りもしますが、既にこの世に生まれ変わり、菩薩精神を携えて、慈済人の家庭に來ていると信じています。

感慨深いものは多々ありますが、一方、とても慰められることもあります。なぜなら、仏法が受け継がれて、三世代、四世代が一緒に暮らし、家族全員が善行し、慈済に参加し、子供たちが親の活動に賛成するだけでなく、一緒に奉仕しているからです。曾祖父母、祖父母、そして両親が幼い子を連れ、手に重い貯金箱を抱えて寄付に來ました。これ

こそが智慧のある教育の賜物と言えます。子供は自分の好きなお菓子への欲求を克服し、そのお金で人助けをするのです。そのような愛を育むことができれば、一家は幸福と智慧に満ちるでしょう。

慈濟は、善と愛が出会うところであり、私たちの世代で形となって現れました。第一世代の慈濟人は、人間（じんかん）菩薩を多く招き入れただけでなく、各自の家庭でも善と愛と福で以て、家伝にしています。

皆さんの分かち合いを聞くたびに、どれも皆さんが一步一步着実に歩み、チームを結集して歩んできた道のりだ

皆さんと一緒にいられることは、「とても幸せなこと！」と私は毎日、自分に言い聞かせています。

五十余年前、慈濟の「竹筒歲月」は、三十人の家庭主婦が日々五十銭を貯めて、花蓮の生鮮野菜市場近くに暮らしていた、助けを必要としていた何人かに奉仕することから始まりました。今ではその数は飛躍的に増加し、この世の衆生のために、世界各地で大勢の菩薩が奉仕しています。慈善の足跡は百三十六の国と地域に到達しています。この力には、あなたや私、彼の両手がなくてはなりません。そして、もっ

と感じます。そして、人に導かれたり、人を導いたりして得た会得の話は尽きず、善行する方法は、お互いに学び、啓発し合っているのです。「彼にできるなら、もちろん私にもできます」と。やる気があれば、成し遂げられない事などありません。

慈濟人は日増しに増え、菩薩が続々と集まり、各国で慈濟の因縁を拡大し、慈濟の志業が広がっています。歳月は過ぎて行きますが、慈濟人が居るところには、必ず善人や善事による奉仕が行われています。このテクノロジーが発達した時代に生き、素晴らしい縁で

と手を取り合い、菩薩を迎え入れなければなりません。

どこにいても法を伝えることができ、どこでも衆生を濟度することができ、誰も菩薩であり、修養ができている人は良い模範であり、賞賛に値します。またある人は、私の前に来て懺悔し、かつての迷いや過ちを皆さんに告白し、「漏氣求進歩」<sup>⑩</sup>をすることで、人生を改めました。悪い状態からよい状態に変えるために、勇気を持って改めることは、大衆の教育にもなるのです。

⑩台湾語の言葉で、自分の前非を他人に告白し、悔い改めるという意味。

たとえ、過ちを犯す悪癖があっても、人は皆、仏性を持っており、正道に帰し、菩薩になることができます。これら過去の物語がなければ、人々に言い聞かせるこの世の法は存在しないでしょう。それを善用することで、「法薬」にもなりましょう。一滴の法水は甘露のようなもので、喉が渴いた人には、この一滴の水が必要なのです。

慈濟の法髄は『法華経』であり、それを抛り所にして菩薩道を切り開いて来ました。『無量義経』は『法華経』の精髓であり、宇宙空間から現代生活に至るまで、分かりやすい道理で、社会

の運営や家庭教育の方法を全て示されており、日常生活中で実践することができます。皆さんが自分の一生で仏法を活用するだけでなく、大衆にも使うようになって欲しいのです。そして、すべての家庭や地域で、誰もが仏陀の教えを理解し、仏陀の教育を広めることを理解して、法髄を各家庭に取り入れ、この敬虔な思いを人間（じんかん）に広めるのです。

今回の行脚は、前回よりも体力が落ちています。生命は滑り台から滑り降りるように過ぎるので、一層、時間を無駄にせず、慧命を伸ばさなければいけません。仏法の中にあり、引き続き歩みやすいように道を切り開き、衆生を濟度しなければなりません。菩薩道という軌道があれば、永遠に道に迷うことはなく、より多くの人々を導いて、広い大道を歩んでください。皆さんが心して精進することを願っています。

（慈濟月刊六九七期より）

けないと感じ、氣力を絞って頑張っています。過去にも説いて来て、今も説いています。将来は皆さんが私の教えを受け継いで伝え、慈濟の法が人間（じんかん）に根付いていくことを願っています。生老病死は自然の摂理で、世の中は常々集まりや別れがあり、無常の人生の中で、私は何も求めず、今日だけを大切にしています。毎日、目が覚めると、手足が動き、ベッドから下りられるなら、今日すべきことをしっかりとしなければなりません。

私の心願は「仏教の為、衆生の為」です。今はこの因縁に恵まれて、共に



朝食にマントウ

簡単に食事を済ませ、  
仏法の香に浸ることに時間を費やす



文・王鳳娥（花蓮慈濟ボランティア） 撮影・蕭耀華 訳・萱萱

毎

朝六時、花蓮静思精舎の食堂（じきどう）の食卓には、温かくておいしそうなマントウが大きな皿に盛られている。その幸せな味は、マントウチー

「ピッ！ピッ！ピッ！」精舎の厨房の

二階で、蒸し器のタイマーが鳴った。

ボランティアの李勇徳（リー・ヨンドー）

さんと陳秋元（チェン・チュウユエン）

さんが分業と協力の下に、一気に蒸し器



の扉を開けた。「ポーン！」という大きな音と共に白い蒸気が吹き出し、マントウが出て来ると、甘い小麦粉の香りが鼻を突いた。

「蒸し器の中は百度の高温と高圧ですから、マントウが蒸しあがったら扉を一気に開けないと、中にある三百個のマントウはあつという間に萎んで変形してしまいます」と陳さんが説明した。

精舎には温度調節機能のある発酵機がないので、冬は蒸し器の後ろに扇風機を置き、その熱気を発酵機に向けて送ることで、マントウの発酵を促していたの

である。

最も時間のかからないマントウを朝食にするのには理由がある。「上人は、精舎の師父やボランティアが時間を無駄にせず、仏法の教えを聞くことに期待しているのです」と、粗熱のとれたマントウの包装を手伝っていた徳種（ドードウ）師父が笑顔で言った。

### 手作業の生産工程

毎月決まった日にマントウを作る！

作る三日前に徳宛（ドードン）師父が

老麵（前回の生地）を発酵させ、前日に徳椒（ドージャオ）師父が中種生地を発酵させておく。当日の早朝に材料を準備をする。朝食後に二十〜三十人のボランティアがやって来るが、どの生地にも何の食材を入れるかは既に決まっていて、順序正しく作っていく。

### 初心者からプロまで

元々、精舎の朝食は、お粥と数種類のおかずだったが、十数年前、證嚴法師が、朝の日課や開示の時に全員が参加できる

ように、と思い、朝食を簡素化し、準備に必要な人数と時間を減らそうと考えた。

「以前、朝食は三十卓ほどでしたが、今は五十〜六十卓以上になっています。」「毎朝四つのおかずとお粥を作っていたら、何百ものお皿と箸、スプーン、それに鍋が必要になり、大量の水を使って、野菜と食器を洗わなければなりません」と、徳椒師父が言った。

初期の頃、厨房担当の師父は朝三時に起床していた。

「当時は竈で薪を焚くため、準備に多くの人手と時間をかけていました。その

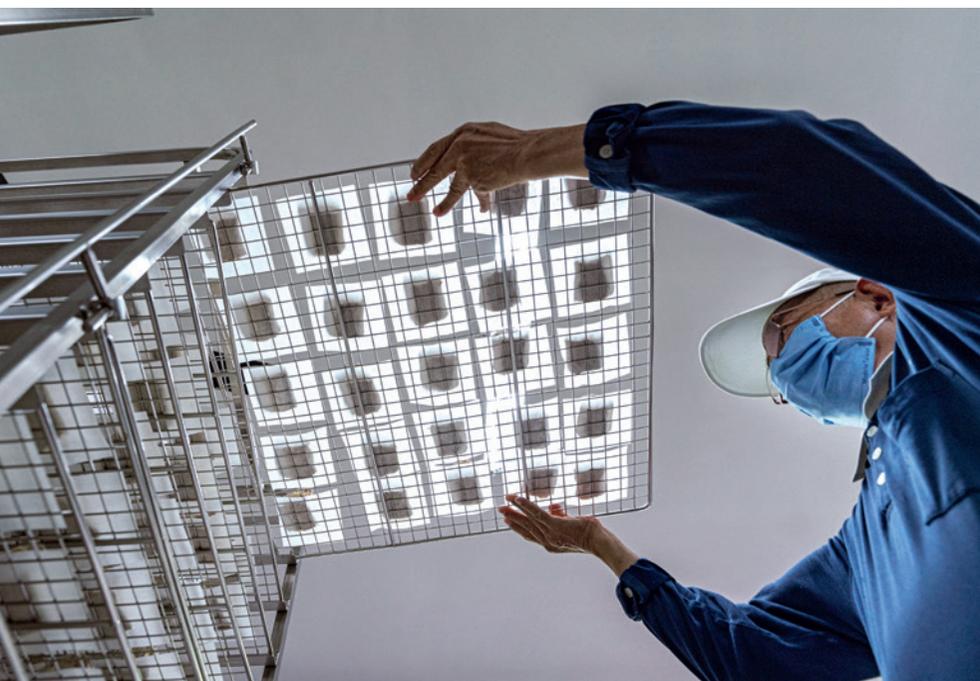


写真右上 捏ね終わったマントウ生地は、生地プレス機で10数回重複してプレスすることで、表面がスムースになって弾力性が出る。

写真右下 季節に合わせて、牛蒡やセロリ、サトイモ、ナッツ、干しリュウガン、カレー粉などを加える。

写真左上 生地を内側に巻いて細長く伸ばし、等分にカットする。

写真左下 発酵が終わるのを待てば、蒸す準備ができた生地が出来上がる。





後、スチームクッカーを使って料理するようにはなりましたが、テーブル数が增えるにつれ、やはりとても大変でした”。

法師が朝食の簡素化を提案すると、徳曉（ドーシヤオ）師父は数人の師父たちとマントウの作り方を研究し始めた。当初は、当日に発酵させて生地を作り、機械で切っていた。しかし、そうやってできたマントウは、見た目にも口当たりも良くなかった。ある日、ボランティアの林順発（リン・スンファー）さんと徳宛師父が生地をこねていた時、経験豊富な林さんが、「試しに中種生地を使ってみ



たらどうでしょうか」と提案した。そして出来上がったマントウが、美味しく出来上がったのだ。

その後、高雄でパン屋を営むボランティアの李少邁（リー・スアオマイ）さんが、徳宛師父に老種生地を使ったマントウの作り方を教えた。師父たちが研究した結果、中種と老種を使ったマントウは、風味が良くなるだけでなく、モチモチして美味しく、健康に良いという予想外の結果が得られた。チームの研究が実ると、業務用蒸し器で作ったマントウの品質が安定し、食卓に出すのに十分



な量のマントウも作ることができるようになったことで、徐々にマントウが朝食の主食になるようになった。

喜んで衆生を供養する

「初期、地下室でマントウを作ってい

た頃は十一〜十二人ほどでしたが、今は人数が増えました。多くの方が六十代から七十代で、八十代の人もいますが、皆働けることに大きな喜びを感じています」と、宜蘭のボランティアである陳春桂（チェン・ツウングエイ）さんが言っていました。同じく宜蘭のボランティアである蔡

素琴（ツアイ・スウーチン）さんは、嬉しそうにこう語ってくれた。

「精舎に帰ってマントウ作りをするのは、まるでバカンスに来ているようで、心の充電になります。帰るたびに、次の月が待ち遠しくなります」。

マントウ・チームには、劉鑑（リュウ・ドン）さんと宜蘭の十数人、そして彰化の黄志清（ホワン・ジーチン）さん、葉東壬（イエ・ドンレン）さん、台北、台中、台南、高雄、台東、花蓮などからのボランティアが参加している。皆、「マントウ作りで大衆を供養する」良縁を大切にしている。

休む間もなく緻密な作業工程で、次々と蒸し上がるマントウを仕上げ、二日間かけて約一カ月分のマントウを作って冷凍保存する。毎朝、交代で厨房当番する師父が、朝の日課が終わった師父やボランティアたちの食事のために、それを冷凍庫から取り出して蒸し、食卓に出す。また、師父は、恭しく法師にも出来立てのほかほかのマントウを持っていく。

精舎の師父の真心とボランティアの気持ちがかもったこのマントウは健康的な上に、大衆の慧命を育んでいる。

（慈濟月刊六八九期より）





慈濟のSDGs

文・葉子豪 慈濟月刊誌執筆者 訳・高雄外国語チーム日本語組

# 医療の普遍化 誰もが医療にアクセスできる世界へ

数分間の白内障手術で、長年失明していた患者が視力を取り戻した。オーダーメイドの義肢で、身障者が移動の自由を取り戻した。一時間以内に眼鏡ができ、貧困家庭の子どもは黒板の字が見えるようになった……「あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する」、これは国連SDGsの目標3であると共に、この半世紀、慈濟が慈善志業と医療志業を結び付けて実践して来た、世界での使命と成果である。

スリランカのコロナボで貧しい人々を診察するシンガポール慈濟人医会の医師。  
(撮影・蕭耀華)





## 【慈済の活動XSDGs】シリーズ

曾

文ダム流域に位置する嘉義県大埔郷は、山奥であることに加え、ダムによって広大な田畑が水没してしまっただ。それが原因で、多くの若者が働き口を求めて、他の地方に出て行った。少ない人口では医療機関を維持できないだけでなく、小さな診療所さえない状態が続いた。

この「無医村」で医療を提供するため

にして、大埔郷で診療所まで来られない患者さんを見つけ出し、在宅ケアを行っているのです」。

毎週水曜日に大埔郷で診療を行っている、慈済大林病院中医部針灸外傷科の葉明憲（イエ・ミンシェン）主任によれば、在宅ケアが必要なお年寄りの多くは一人暮らしだという。遠く離れて暮らしている子どもたちが毎週、親を診療所に連れて行くのは不可能である。そこで、医療スタッフや介護ヘルパーに頼って、家庭訪問し、医療やリハビリ、配食等のサービスを提供してもらっている。葉医師は二十二年にわたって、診察が終わった後、

に、慈済人医会は十年にわたって、毎月、ボランティアと医師、看護師たちが現地を訪れて診療を続けてきたが、常駐はできなかった。二〇〇二年に、開院から二年になる慈済大林病院が政府による二つの医療プロジェクトを受託した。医師が常駐し始めてから、住民はようやく最低限の医療が保障されるようになった。

「ホームヘルパーの皆さんと連携を密

いつも、自立した生活ができず、「家を出られない」患者を訪問ケアしている。

総合診療科の林英龍（リン・インロン）医師は現在、大埔郷の常駐医師兼救急外来の責任者であるが、八年間、毎月平均して二日しか休暇を取らず、百件単位の蜂に刺されたり、蛇に噛まれたりした中毒症状に対処している他、交通事故や労働災害、心臓発作などの緊急患者にも対応して来た。大林慈済病院のリユウマチ免疫科や循環器内科、皮膚科、歯科などの専門医もいつも交代で山奥へ支援に来てくれる。

慈済医療チームのサポートの下、何人



北部慈濟人医会は定期的に、新北市三芝区、双溪区、瑞芳区、平溪区などを訪れて、郊外に住む高齢者の健康に関心を中心を寄せると共に、彼らとまるで古くからの友人や知己のように交流している。(撮影・李政明)

かのお年寄りには目に見えて健康が改善した。脳卒中で寝たきりになっていた人が起きて立ち上がったたり、認知症の高齢者が言語、動作などの面で回復したり、昔のことを話してくれる人まで出た。大埔郷に医師を派遣して「二十四時間守る」以外に、大林慈濟病院は嘉義県梅山郷及び竹崎郷、雲林県古坑郷で巡回医療も行っている。

## 外国人労働者のために、 休診日も診療

「病気の人が病院に来られないから、

奉仕できる人が出向かなければいけない」と、一九六六年という早い時期に、「病と貧困の連鎖」を見抜いた證嚴法師は、「貧困と病の双方を防ぐ」という根本的な取り組みを提唱した。一九七二年、花蓮市仁愛街に開院した「慈濟施療院」は、診療所で施療するだけでなく、花蓮県や台東県のへき地にも出向いて、往診を行った。その活動は、一九八六年に開院した花蓮仏教慈濟総合病院に引き継がれるまで続いた。

現在、慈濟は台湾に二つの医学センターと二つの地域病院、五つの中小規模の病院及び診療所を持つまでになり、慈

濟人医会の医師、看護師、薬剤師、ボランティアなどは二千七百人を超えている。通院が困難なへき地に住んでいるお年寄りには、人医会の医療ボランティアが訪問診療を行っている。「移動診療」は、空間の壁を越えて山間部のへき地に医療を届けているだけでなく、時間の壁を越えて、にぎやかな都会に住む社会的マイノリティにもアプローチしている。

「あなたがケアしているお爺さんは何歳ですか？」

「八十歳です」

「ちゃんと寝られないようですが、眩暈はしますか？夜は何時間ぐらい寝ます

か？」「四時間ぐらいです……」

日曜日の台北駅ロビーは大勢の人の声で騒がしかったが、臨床心理士とインドネシア人労働者姉妹の会話を妨げることはなかった。慈濟人医会北部地区と台北市の共催による「台北市外国人労働者ヘルスケア活動」が行われて、もう二十年になる。医療関係のボランティアは、台北駅に心療内科、内科、歯科、眼科、整形外科、産婦人科、中医科などの診療科ごとにブースを設け、無料で検査や相談を行っている。そこでは採血や注射等の侵襲的医療行為は行わず、薬も提携クリニックで健康保険証を提示して初めて、



受け取れるが、それでもきつい仕事に耐えている外国人労働者にとっては大きな助けである。

「彼らの多くはインドネシア人の住み込み介護ヘルパーで、介護対象の多くは自立した生活ができないお年寄りです」。この活動で連絡担当を務める慈済ボランティアの顔漢始（イエン・メイリン）さんによると、住み込みの介護ヘルパーは体力的にきつい仕事で、夜中に起こされることは日常茶飯事だという。日曜日は休日だが、病院や診療所もほとんどが休みであるため、自分たちはなかなか診

台北駅で20年にわたって続けてきた、外国人労働者ヘルスケア活動は、移動病院のようだ。（撮影・江宝清）

察を受けられない。そこで、慈済人医会は、彼らが診療を受け易いよう、あえて日曜日に奉仕しているのである。

このように山間部や離島等のへき地、都市部の外国人労働者、路上生活者に医療奉仕するだけでなく、慈済の医療機関や人医会のメンバーは、施設に向いて植物状態や半身不随の患者など社会的弱者をケアし、病気の苦しみを緩和すると共に、家族をも安心させている。

## 白内障手術が人生を変えた

「あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する」、これは国連の持続可能な開発目標（SDGs）の目標3にあたる。この中では、二〇三〇年までに妊婦、新生児、五歳未満の子どもの死亡率を減らすこと、また、財政リスクからの保護を含めて全ての人々を保護すること、基礎的な保健サービスへのアクセス及び安全で効果的かつ質の高い安価な必須医薬品とワクチンへのアクセスを含む、ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC）を達成すること

に出て、慈済医療志業と人医会のボランティアが直面したのは、切実な医療のニーズだった。極ありふれた簡単な手術でさえ、時には一家の運命を変えることがある。

フィリピン・マニラの慈済眼科センターでは、いつも早朝から各地の貧しい眼疾患者が家族に支えられて訪れ、検査や診療を受けている。手術を終えたケビン・アンドラードさんは不安な気持ちで、回復室で待っていた。彼は三年余り前に白内障で視力を失ったが、治療に行く余裕がなかった。一度は自殺を図ったこともあるが、幸い子どもがすぐ

などを目指しているが、これらの項目は、台湾においてはほぼ全面的に達成されている。

しかし、世界保健機関（WHO）と世界銀行の統計によると、世界では今なお三億八〇〇〇万人以上が自費で医療費を支払わなければならないために極度の貧困に陥っており、「大病院」以上のレベルの医療サービスを受けられる人は一割に満たない。東南アジアやアフリカ、中南米など開発途上国の貧困層は、診療所に行くことさえ難しい。まして入院治療など望むべくもない。

医療資源が比較的豊富な台湾から外に発見して一命を取り留めた。「これが見えますか？」

慈済眼科センターで手術を終えた後、カテリーナ医師は指を差し出して尋ねたが、ケビンさんは悲しそうに「見えません」と答えた。しかし、三時間ほど経つと、彼はなんと自分で起き上がって、用を足しに行ったのである。それは目が見えている人と同じ動きだった。視力を回復できたのは右目だけだったが、それでもケビンさんは家族を養うために仕事に戻れる日が待ち遠しかった。

無料の眼科手術は、フィリピン慈済人が三十年近くにわたって取り組んでき



慈済フィリピン眼科センターでは貧しい患者を無償で治療している。医療ボランティアの家庭訪問で、患者のケビンさんを励ます眼科センター主任（下の写真）。2023年、眼科センターでは3000件近い手術を行った（上の写真）。（撮影・ジャマイカ・メイ・ディゴ）

た、医療成果の一つにすぎない。フィリピンには大小合わせて七千以上の島があり、貧富の差が激しい。その上、交通も不便なため、遠い離島に住む貧しい患者の中には、生まれてから一度も病院に行ったことのない人さえいる。一九九五

年、フィリピン慈済人は施療チームを立ち上げ、へき地へ奉仕に行った。

フィリピン慈済人医会のベテランボランティアである柯賢智（コー・シェンツィー）医師は、二十九年前に最初の一步を踏み出した時のことを振り返って、感



慨深げに言った、「あの頃は何も設備がありませんでした」。

最初の麻酔器は米軍が廃棄処分にした中古品だった。手術用の「無影灯」もなく、普通のライトを寄せ集めて照明にしていた。田舎で手術を行う時は、華僑学校の図書館や事務室を借りて、事務机を手術台にしなければならなかった。しかし、設備面で寄せ集めであっても、医療スタッフとボランティアの熱意が冷めることはなく、皆で住民を助けるために一杯、力を尽くした。

「施療活動のたびに、参加する看護師

やボランティアの人数は増えて行きました。金銭的な報酬もなく、名誉が約束されていくわけでもないのに、彼らはひたすら活動を続けました。この数十年間に変わったことはたくさんありますが、変わっていないのは愛です」と柯医師は賞賛した。

フィリピン慈済人医会は、年に三回から四回の大規模な施療活動を三十年近くにわたって続け、これまで既に二百六十回以上行い、受診した患者は延べ三十万人を超える。首都マニラの慈済眼科センターでは二〇二三年に延べ二万人余りを

診察した。また、南部のサンボアンガ市には義肢センターがあり、身障者のために無償でオーダーメイドの義肢を作っている。

施療は対価がないが、患者を助けるだけでなく、医療スタッフたちをも勇気づけている。インドネシア人医会メンバーのルズビー医師は今年施療活動に参加し、顔面脂肪腫切除手術を二件行った。術後、医師は二人の患者から感謝されたが、収穫が最も大きかったのは自分のほうだと感じている。「人の望みを叶えるのは、素晴らしい気持ちです」。

人医会の施療活動はフィリピン、マレーシア、インドネシア、シンガポールなどで長年続いているが、時にはその他の国に支援に行くこともある。今年八月、スリランカのカルタラ県で、シンガポールとスリランカ現地の医療スタッフ及びボランティア合わせて、総勢三百五十二名による大規模な施療が行われた。スリランカでは、診察自体は無料だが、薬は自費である。ここ数年で薬の値段が二倍になり、収入の多くない住民には重い負担となっている。

現地の公立病院には医師が四人しかお



ヨルダンの慈済人は長期にわたって、現地の貧困層やヨルダンで暮らしているシリア難民を支援しているが、台湾の施療及び配付団も、何度も支援に訪れた。2019年、ゴルシャフィの貧しい農村で行われた歯科の施療では、老若男女が暑さに耐えながら、並んで診察を待っていた。(撮影・蕭耀華)

らず、眼科も歯科もない。また、私立病院で歯科の根管治療をしようとするれば、四万ルーピー（約二万円）もかかり、普通の人には容易に支払える額ではない。そのため、治療の開始時間が午前八時半にも関わらず、明け方の三時ごろから待つ住民もいた。二日半で延べ四千六百人が治療を受けた。

## 豊かな国にも

### 医療に恵まれない人がいる

東南アジアや中南米、アフリカなどの

的な重病に罹ると、為す術がない。また、失業して貧困になった人も保険料が払えなくなるといふ。「保険に入っていない人は、盲腸の手術で入院するだけでも破産してしまうのです」と、林医師はため息をついた。

一九九三年十一月、アメリカの慈済人は、南カリフォルニアのアルハンブラ市に最初の治療センターを立ち上げた。内科と歯科、中内科から始まり、徐々に診療科を増やしていった。そして、治療に訪れた路上生活者がシャワーを浴びることで、清潔で尊厳のある面持ちを取り戻

開発途上国だけでなく、世界一の医療水準と世界で上位の国民所得を誇るアメリカでも、なお多くの人が治療に来る。一体なぜだろうか。

「問題は健康保険と在留資格にある」と話すのは、慈済医療志業執行長で、国際慈済人医学会のまとめ役でもある林俊龍（リン・ジュンロン）医師だ。かつてアメリカ・ロサンゼルスのスリスリッジ医学センターで院長を務めた林医師によれば、アメリカ国民は通常、基本的な医療保険に加入しているが、在留資格を持たない移民は医療保険に加入できず、突発

せるようにと、バスルームも設置した。二〇〇五年、治療センターは地域外来診療所になり、対象範囲を広げて一般市民も有料で受診できるようになったが、社会的マイノリティを対象とした治療は継続しており、医療と慈善を結び付けた支援をしていることに変わりはない。

広い国土に対応するため、アメリカの慈済人は「移動診療」にも力を入れており、十二台の「大愛医療巡回車」を製造した。バスを改造して、医療機器を搭載したこの医療巡回車は、医療を待つ人々の元へ直接移動し、車内で眼科、歯科など



の医療行為をすることができると。

「視力検査から眼鏡ができるまで一時間もかかりません。ニューヨークでは信じられないことです。低所得世帯の子どもにとつて、眼鏡はとても重要です」。アメリカ慈済人医会のベテランボランティアである、歯科医の廖敬興（リヤオ・ジンシン）さんによれば、貧しい家庭の子どもの

今年、アメリカ・オクラホマで行われたコミュニティの医療活動で、低所得者と無保険者が歯科診療車の中で治療を受けた。（撮影・呂宛潔）

多くは視力に問題があっても気付かず、黒板の文字がはつきり見えないことが間接的に成績に影響しているという。人医会ボランティアが学校を訪れて、無料で視力検査をして眼鏡を作ってあげると、先生が書いた字がはつきり見えるようになり、「成績が一気にCからAに上がったのです」と、廖医師は笑顔を見せた。

全米の慈済の九大支部は、二十四の地点に慈済人医会を設けており、国内だけでなく、メキシコ、ハイチ、ドミニカ、エクアドル、ボリビア等の中南米諸国でも施療活動を行っている。

国際慈済人医会メンバーは、現在、二

十八の国と地域に及んでいる。一万五千人余りの医師、看護師、臨床検査技師、薬剤師に加え、事務ボランティアがおり、力を合わせて貧しい患者に総合医療を無償で提供している。また、世界で大規模災害が発生した時も、積極的に支援活動に参加しており、二〇二三年末現在、五十八の国と地域で、延べ四百万人以上に専門医療を提供して来た。

テクノロジーで世界の隅々に愛を

国内外の医療環境が大きく変化するに従って、医療で人助けをする方法も変

## 国際慈済人医会（TIMA）

メンバー：28の国と地域にわたる。 施療回数：延べ18,420回実施。

施療会場：58の国と地域で実施。 受診者数：延べ4,023,784人。

動員数：医療従事者とボランティア、延べ447,831人。

（1996年～2023年12月までの統計）

訳・何慧純

## 世界における慈済医療志業拠点年表

- 1972 台湾花蓮市仁愛街で「慈済施療院」が開院。
- 1986 台湾で花蓮仏教慈済総合病院が開院。2002年には医学センターに昇格。
- 1993 米アルハンブラで施療センターがオープン。慈済医療志業で初めての海外拠点となった。米国内では現在既に3カ所の慈済診察所が「連邦資格を取得した医療保険機関」となっている。
- 1997 マレーシア・ペナン州で慈済の人工透析センターがオープン。マレーシア最初の民間の無料人工透析センターである。今はペナン州、バタールワース市、ケダ州の3カ所。
- 1999 台湾で玉里慈済病院が開院。
- 2000 台湾で関山慈済病院及び大林慈済病院が開院。
- 2002 マレーシア・マラッカ施療センターがオープン。今はマラッカ市、クラン市、クアラリンプールの3カ所。
- 2004 シンガポール施療センターがオープン。2024年には人工透析センターがオープン。
- 2005 台湾で台北慈済病院が開院。2024年には医学センターに昇格。
- 2007 台湾で台中慈済病院が開院。
- 2008 フィリピン・サンボアンガで眼科センターがオープン。今はマニラとサンボアングアの2カ所。
- 2012 中国の蘇州慈済診療所が開所。
- 2018 カナダで慈済中医診療所と教学センターがオープン。
- 2019 台湾で斗六慈済病院が開院。
- 2020 台湾で嘉義慈済診療所が開所。
- 2021 タイで施療センターがオープン。
- 2021 インドネシア大愛施療センターがオープン。
- 2022 台湾の三義慈済中医病院が開院。
- 2023 ネパール・ルンビニで慈済施療所が開所。
- 2023 インドネシアで慈済病院が開院。
- 2024 香港で大愛中医クリニックがオープン。

わってきた。二十一世紀の医療従事者は、世界を一変させる、革命的な進歩を目的の当たりにするだろう。

元慈済大学医学院院長で、現慈済教育志業執行長の王本榮（ワン・ベンロン）医師は、現在各方面で注目されているAIの活用を例に挙げて説明した。「画像認識AIを診断のサポートとして利用すれば、医師の判断に比べて間違いなく精度が向上します。AIは医療資源の偏在や需給の不均衡が解決できます。そして、遠隔医療に使えば、地理的な限界はなくなり、多くの過疎地の弱者住民をケ

アすることができません。精密医療にせよ、いわゆる個別化医療やデジタル治療にせよ、AIはかなり大きな助けになるでしょう」。

しかし、ハイテク医療や先進医療を追求する一方で、心と体に寄り添う「人間本位」の医療も忘れてはならない。そこで、人類の健康と福祉の増進という理想を実現し、真に人を苦しみから救うことができるのである。（資料提供・慈済病院、二〇二四年国際慈済人医会年次総会、『慈済アメリカ医療志業30年特別号』（慈済月刊六九六期より）

證嚴法師 行脚の足跡

## 福を知って、惜しんで、 更に福を作る



平安であることに感謝すれば、心は満たされます。満足できない人は、永遠に自分が幸福であることを知りません。

この人生を精一杯捧げる

九月九日、基金会主任たちの報告の時間に、洪静原（ホン・ジンユン）師姐は慈済の献体への取り組みについて言及

しました。多くの慈済ボランティアが健康なうちに献体登録を済ませ、重病を患った時には特に花蓮慈済病院に戻って緩和ケアを受け、最後の瞬間を迎えたらば、動かなくなった身体を慈済大学に

◎文・釋德仇／訳・濟運

寄付することで願いを果たしていると述べてきました。

上人曰く、慈濟ボランティアは慈濟と縁を結んで以来、「役に立つことに価値がある」という人生観を築き、生死を平然と受け入れることができるようになったので、「心に執着がなく、執着がないからこそ」、だからこそ不断に奉仕し、求めず、執着せず、心身を捧げているのです。

「かけがえない生命に値段をつけることはできません。我々は方向をしつかり選び、この人生を衆生のために捧げる

ことができれば、この人生は価値ある人生となるのです」。

「慈濟の人々の愛は口先だけではなく、それを実践していますから、家庭の模範、地域の模範となり、その瞬間に教師となることができるのです。最後まで待つて無言の良師になるではありません」。上人は慈濟大学で「無言の良師」と呼ばれる献体について、世の中で成功を収める人や、子や孫を育てて家庭を成している人の中には、特に慈濟ボランティアが多いと語りました。慈濟に入って誠心誠意

で心身を捧げ、多くの苦しむ人々のために尽くすその姿は、まさに人の模範です。人生の最後に身体までも寄付し、医学のために奉仕しているのです。そうすることで自分の人生を、本当に精一杯、捧げることができたと言えるのです。

## 日々自分が幸福であると感じる

九月十日、シンガポール支部の劉瑞士（リュウ・ルイシ）執行長と幹部たちが精舎に帰り、人工透析センターの運営や

スリランカでの施療、会務への配慮、十周年を迎えた慈濟大愛幼児教育センターの成果について共有しました。それに対して上人は、こう開示しました。

「シンガポールは福地であり、社会福祉や一般市民の生活は標準以上ですが、清潔で明るい環境に住んでいる人々の心が純朴であることは、非常に幸運なことです。私はいつも自分が幸運であることに感謝しています。なぜなら、毎日出会える方々が善知識であり、友人や法縁者が互いに励まし合っているからです。私を

生んで育ててくれた両親に感謝し、この身を以て人間のために福を施し、大衆に利益をもたらしたいのです」。

仏法を学ぶことは、福を求めることではありません。福は、求める必要がないのです。常日頃から真摯に福を施すことで、自然に福が得られるのです。

「もし奉仕を望まず、福を施さなければ、どんなに求めても何も得られません。農夫が田畑を耕さず、種を蒔かず、苗を植えなければ、当然収穫はないのと同じです。季節ごとの作業に心を込め、種を

蒔き、耕作し、収穫を得たら更に種を残し、再び種を蒔き、苗を植えてこそ、十分な食糧が得られ、人々に供給できるのです」。

菩提心を発すること、この一念は一つの種子であり、心を込めて耕し、育てることで「一つ」が無量へと増えるのです。上人は、大きな木も小さな種子から芽を出して成長するのであり、地、水、火、風との良い縁が結ばれてこそ、時間と共に成長し繁茂することができると述べました。福縁を持ち、平安な社会に住むこと

ができて、世界にはたくさんの人々が、生まれた時から厳しい環境に置かれて心が極端な状態になり、絶えず戦渦に巻き込まれ、朝が来るかどうかも分からない中で不安に苛まれています。その苦しみと痛みは耐え難いものです。

上人は、多くの国や地域が動乱に満ちていることを嘆き、人と人との間で争っていることを嘆き、人々の中にあって慈濟シンガポール支部は、人々の中にあって敬虔に奉仕し、その足跡を残した。今年9月には700人のボランティアが街頭で募金を呼びかけ、道行く人々に共に善行をしようと呼びかけた。



が起こり、衆生の業力がますます重くなり、同じ空間の中で衝突が引き起こされ、感情が引き裂かれ、一般市民は本当に苦しんでいると語りました。

「平和で安定して繁栄する幸せな社会に住んでいる私たちは、毎日感謝することが大切です。私は毎日感謝を唱え、すべての人を尊重します。誰もが仏性を持つているのですから、心を込めて修行して自分の本性に戻ればそれでよく、外に求める必要はなくなるのです」。

「皆さんは、こうして精舎に幸福と感謝

けたいと思わなくなります」。

どんなに裕福な国でも、苦しむ人々は存在します。上人はシンガポールのチームを称賛しました。慈善と施療を結びつけ、外に出られない家庭に入って初診を行い、医療を手配し、その後も長期的にフォローアップを行ってボランティアが定期的に訪問したり、家庭環境の清掃を手伝ったりして、安心して病気を治せるようにしていると、その活動を紹介しました。

「人を助けたいという気持ちがあつて

を持ち帰ってくれました。これからも自分に満足し、福を知り、福を惜しむことを期待しています。福を知らない人は、永遠に自分が幸福であることを知らず、外に求め続け、心の中は煩惱でいっぱいになり、欲望がますます強くなり、苦しみが増すのです。実のところ、平安であれば心が満たされて満足するというものです。善を行う志を持つことが大切で、善を行える人こそが福のある人であり、豊かで余裕がある人なのです。もし福を知らなければ、永遠に満足できず、人を助

も、自分の力は限られています。慈濟には多くの志を同じくする法縁者がいますから、互いに福を託し、福縁を共にし、協力して多くの困難な人々を助けることができるのです。私たちはお互いを大切にし、感謝し、祝福し合うべきなのです」。上人はシンガポールのボランティアに、この慈濟の思いを広め、地域で慈濟のボランティアに参加する人々が増えて各地へ伝わり、人々が凡夫から菩薩となつてこの世が浄土へと変わることを願っています。（慈濟月刊六九六期より）

## 台湾 Taiwan

- 慈濟基金会の「慈濟青年学習伴走プロジェクト社会的包摂と国際交流を進める」が認められ、GCSAグローバル企業サステナブル賞」における「社会的包摂部門・社会的包摂リーダー賞」を獲得した。(11月20日)
- 第29回アジアテレビ大賞の受賞式典がインドネシアのジャカルタで開催され、大愛テレビの大愛劇場『打怪任務』に出演している女優の黄瀟怡さんがベストサポート・アクトレス賞を獲得した。(11月30日)
- 慈濟基金会介護推進センターの「台湾全土の独居高齢者をケアする」活動が6年目に入った。台湾全土18の慈濟在宅ケア機構の訪問ケアチームは、慰問でケア世帯の家を訪れると共に、介護センターのお年寄りたちが手編みした「毛糸の帽子とマフラーセット」を寄贈した。(12月6日)
- 慈濟基金会は、經濟部中小及びイノベーション企業署の「2024年 Buying Power 社会でのイノベーション製品及び調達サービスの奨励」における調達部門の金賞と多元的呼応賞の2項目を獲得する栄誉に輝いた。(12月6日)
- 第17回TCSA台湾企業サステナブルアワードで、『慈濟基金会2022〜2023年サステナブル報告書』が企業サステナブル報告賞における最高栄誉のプラチナ賞を獲得した。それは、NGOと政府関係で唯一のプラチナ賞である。(12月11日)
- 慈濟は慈善、医療、教育志業において国立中正大学と協力の覚書を交わした。学術研究と実務応用、教育資源の面で協力と支援を強化し、優秀な人材の育成に力を入れる。(12月12日)
- 慈濟が2015年にトルコで創設したマンナハイ国際学校は間もなく10周年を迎える。延べ30万人以上の難民の子供に付き添い、卒業生はアメリカ教育部とトルコ政府の認証を受けている。学生が『コーラン経』と『静思語』を基にして描いた53枚の絵画が、慈濟人文志業センターに展示されている。(12月15日〜2025年2月6日)

● 台中大肚区にあるスーパーマーケットチェーンの倉庫工事現場で火災が発生し、9人が亡くなった。龍井、清水、沙鹿、梧棲の慈済はボランティアを動員して、捜索人員を支援した。寒い天気を考慮して、警察や消防隊員に生姜茶などの温かい飲み物や食事を提供した他、福祉ベッドと毛布を準備し、百人ほどの救助人員が交代で休息が取れるようにした。犠牲者の遺体が火事現場から運び出された時、ボランティアたちが家族に付き添った。(12月19日)

### ミャンマー Myanmar

● 9月初め、全国64の町や村が台風ヤギによって甚大な被害を被った。慈済は9月28日から10月2日まで、激甚被災地の一つである首都ネピドーで被害の視察を行い、デゴン郡で二段階に分けて支援活動を展開した。「仕事を与えて支援に代える」方式による村の清掃活動には、延べ6917人が参加した。また、33軒の建設支援や家屋の修繕、2520メートルもの村と

外部を結ぶ主要連絡道路の修理の他、307世帯に見舞金、1203人の学童に文房具及び食糧、種子、炊き出し、台所用品、学校のパソコン設備などを提供した。支援は15の村の2355世帯に及んだ。  
(10月7日～27日、11月15日～25日)

### アゼルバイジャン Republic of Azerbaijan

● 慈済基金会の代表者らが、アゼルバイジャンの首都バクーで開かれた、国連気候変動枠組条約第29回締約国会議(COP29)に出席し、サイドフォーラムに参加する他、各組織と交流した。(11月11日～22日)

### フィリピン Philippines

● ルソン島北部のカガヤン州は、11月たて続けに6つの台風に襲われ、5万世帯余りが被災した。ボランティアは500キロ離れた激甚被災地に到着

し、5日間で4450世帯に米と生活物資を配付する他、家屋が全壊した93世帯の建材費を補助した。(11月20日～23日)

## カナダ Canada

● トロントゴールドスター・シルバー世代ビレッジに、慈済中医診療センターがオープンした。現地の養護ホーム内に設立された初めての中医診療所で、高齢者と地域住民をケアしている。(11月28日)

## マレーシア Malaysia

● 11月28日、全国で豪雨による被害が発生し、15万人余りが緊急避難する、この10年近くで最も酷い水害となった。激甚被災地のケランタン州とトレンガヌ州、ケダ州で、慈済ボランティアは政府が設置した避難所と被災者を受け入れている寺院を訪れて慰問した。毛布約3500枚、福慧ベッド、食糧、日用品などを緊急に届けると同時に、医療拠点を立ち上げて支援した。

2025年1月から二段階目の配付が行われる。

(11月28日～12月6日)

## ジンバブエ Zimbabwe

● 干ばつが食糧危機を加速させているため、政府は象を捕殺して食料にする計画を発表したため、慈済は生命を守るモットーの下、11月下旬から二段階に分けて、順次600トンのトウモロコシ粉を7つの州の3万世帯に配付する。(11月下旬より)

## アメリカ United States

● 慈済が海外に設立した初めての支部であるアメリカ慈済の志業は12月に満35周年を迎え、ボランティア精進キャンプを催す他、『家譜(家系図)』シリーズの書籍を発行する。また、慈済のアメリカ社会への貢献を表彰するために、12月21日にホワイトハウスはアジア系アメリカ人代表の張克塵氏をバイデン大統領の代理として派遣し、祝辞を贈呈する。(12月21日)

# 各国の連絡所

## 本部

971 花蓮県新城郷康樂  
村精舎街 88 巷 1 号  
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966  
志業センター (静思堂)  
970 花蓮市中央路三段 703 号  
TEL: 886-40510777 # 4002  
0912-412-600 # 4002

## アメリカ

総支部 (San Dimas)  
TEL: 1-909-4477799  
北カリフォルニア支部  
TEL: 1-408-4576969  
ニューヨーク支部  
(New York)  
TEL: 1-718-8880866

## 香港

TEL: 852-28937166  
フィリピン Manila  
TEL: 63-2-7320001  
タイ Bangkok  
TEL: 66-2-3281161-3

花蓮慈済医学センター  
970 花蓮市中央路三段 707 号  
TEL: 886-3-8561825

玉里慈済病院  
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号  
TEL: 886-3-8882718

関山慈済病院  
956 台東県関山镇和平路 125-5 号  
TEL: 886-89-814880

大林慈済病院  
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号  
TEL: 886-5-2648000

台北慈済病院  
231 新北市新店区建国路 289 号  
TEL: 886-2-66289779

台中慈済病院  
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号  
TEL: 886-4-36060666

斗六慈済病院  
640 雲林県斗六市雲林路2段248号  
TEL: 886-5-5372000

慈済大学  
970 花蓮市中央路三段 701 号  
TEL: 886-3-8565301

台北支部 (新店静思堂)  
231 新北市新店区建国路 279 号  
TEL: 886-2-22187770

慈済人文志業センター  
112 台北市立德路 8 号  
大愛テレビ局  
TEL: 886-2-28989000

静思人文  
TEL: 886-2-28989888

カナダ Vancouver  
TEL: 1-604-2667699

メキシコ Mexicali  
TEL: 1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo  
TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo  
TEL: 55-11-55394091

イギリス London  
TEL: 44-20-88699864

フランス Paris  
TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg  
TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam  
TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg  
TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna  
TEL: 43-1-7346988

南アフリカ Gauteng  
TEL: 27-11-4503365

中国蘇州  
TEL: 86-512-80990980

ベトナム Hochiminh  
TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon  
TEL: 95-1-541494

マレーシア  
セラランゴール支部 KL  
TEL: 603-62563800

ペナン支部 Penang  
TEL: 604-2281013

シンガポール  
TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta  
TEL: 62-21-5055999  
大愛テレビ局  
TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota  
TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman  
TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul  
TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney  
TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド  
Auckland  
TEL: 64-9-2716976

# 慈済

2025年1月20日発行・337号

中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄

Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈済伝播人文志業基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路8号

編集 慈済日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@daaitv.com

慈済基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16

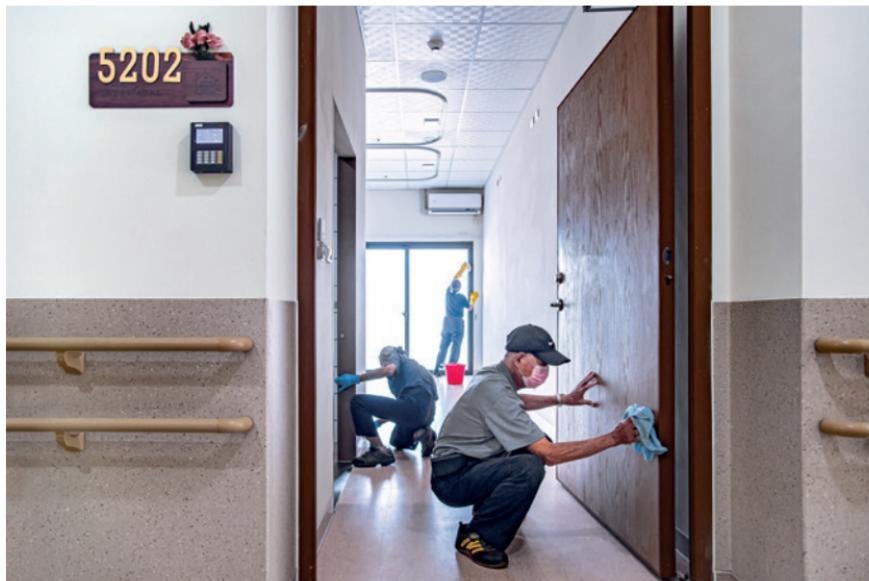
電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いです。(日文組編集同人)



## 台中市市立仁愛総合介護施設がオープン 台中慈濟病院のチームとボランティアが大掃除

台中市政府が慈濟病院に運営を委託した市立仁愛総合介護施設は、9月30日にオープンした。1階にはデイケアセンターとサービスセンターの他、診察室、シニア向け店舗、美容室、ベーキング教室などがある。内装には暖色系の色が使われ、家具も高齢者の快適さを考慮して選ばれている。

8月31日、400人余りの中部地区の慈濟ボランティアが、大掃除に来た時、皆思わず、「まるでホテルのようだ！」と賞賛した。（撮影・黄筱哲）



慈濟日本サイト



慈濟ものがたり